

霧の山

2011年4月3日
久家 隆男

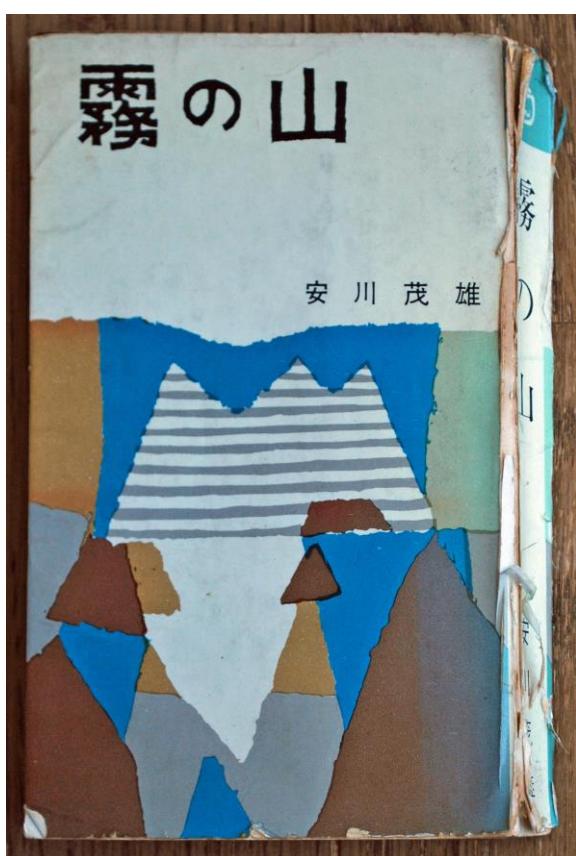
「こんなときに山などに行ってよいのか？」

「俺が山に行つても行かなくても何の影響もないだろう。」

自問自答しながら早朝の青梅線に乗った。こんな後ろめたい感じで山に行くのは初めての経験だ。3週間のブランクで山恋いが募り、大震災以降初めて山靴を履いた。

快晴の日曜日だというのに車内には空席が目立つ。通常ならば、この時期に羽村駅から座ることは無理なのに。

軍畠駅で下車して高水山に向かう。前後に二人ばかり歩いていたが、やがてばらけてしまった。岩茸石山に着くと、私だけの山頂である。遠望が効き、棒の折山、川苔山を始め、3月下旬にしては豊富な残雪を抱く石尾根が指呼の間に思える。一人たたずみ、飽かず山々を眺めている内に、山に登れる幸せが身にしみ、柄にもなく感傷的になる。



その内、思考は遙か遠い昔に飛ぶ。学生時代に山仲間から借りて読んだ安川茂雄の「霧の山」を何故か想い出す。小西六に入社してから神田の古本屋を探し廻り、自分でも買った小説だ。

長編だが、かいづまんと述べれば、このようになる。

戦前に山好きな学生が工場勤務の合間に山をぬって穗高に行く。徳沢で友人から幼なじみの女性を紹介される。やがて、その友人は南方で戦死するが、主人公は戦後にも精力的に山に登り、二人は次第に接近する。

私が古い小説を覚えているのには二つの理由がある。

その女性の名は美穂と言う。美ヶ原の美に穂高の穂である。学生時代には小説のヒロインに憧れを感じていた。

もう一つは友人が遺した詩である。

「残雪と偃松と残雪と偃松と

黒と銀と黒と銀と

ゆらゆらゆれる尾根をわたって
一人の人がゆく
その人はふりかえらない
ふりかえることは孤独にとって罠である
もしも背後の景色の方が美しかったら
どうする？
もとのみちを帰るのか？
霧がやってきてゆがんだその人の後姿を乳色のカーテンでかくしたときに
おそるおそる頸をまわしたのは、臆病なけもののようなその人だ。
何が見えた？
見えたのは霧にとりまかれた自分だけではなかったか？ それが罠だ。
ついに罠にかかった痛ましい過ちを
やがて消えてゆく霧も運び去ってくれない

残雪と偃松と残雪と偃松と
ゆらゆらゆれる尾根をわたって
二度とふりかえらない人がゆく
黒と銀と黒と銀と…」

改めて読むと暗い詩である。私は卒業後に某電気メーカーに2年間勤務したが、当時はこの詩に魅せられ、紙に書いて独身寮の壁に張っておいた。屈曲した青春時代の感情に同化していたのかも知れない。

いくら気に入った詩でも50年近くの歳月が経つと記憶が薄い。帰宅して物置をかき回してみると、嬉しいことに「霧の山」が見つかった。昔の本なので活字が小さく、今の私には読み難い。それでも詩の部分を読むと、懐かしさが込み上げてくる。

岩茸石山から惣岳山、御岳駅までの道も普段の日曜日の半分も人がいない。30%か20%か？

大震災は小さなハイキングにも影響を及ぼしている。